

日本國天皇家論 章 上宮聖王

日本國天皇実伝

遣唐使は日本國

推古15年の遣唐使

推古紀に遣唐使の記事がある。

推古15年(607)

- ・7月戊申朔戊に、大禮小野臣妹子を大唐に遣す。

推古16年(608)

- ・夏4月小野臣妹子、大唐より至る。唐國、妹子臣を號けて蘇因高と曰ふ。即ち大唐の使人斐世清・下客十二人、妹子臣に従ひて、筑紫に至る。難波の吉士雄成を遣わして大唐の客斐世清らを召す。唐の客のために、また新しき館を難波の高句麗館の上に造る。
- ・6月15日、客ら難波津に泊まれり。この日に、飾り船三十艘をもって客らを江口に迎えて、新しき館に安置する。ここに中臣宮地連鳥摩呂、大河内直糠手、船手王平をもって掌客とす。ここに妹子臣、奏して曰く、「臣、参還の時に、唐帝、書をもって臣に授く。しかるに百濟國を通過する日、百濟人、探りて掠め取る。これをもって上るを得ず」と。ここに群臣これを議りて曰く、「それ使人は死するといえども旨を失わず。この使い、なんぞ怠りて大国の書を失うや」。すなわち流刑に坐す。時に天皇、勅して曰く、「妹子、書を失う罪ありといえども、たやすく罪すべからず。その大国の客ら聞くこともまた良からず。」すなわち赦して坐せず。
- ・8月3日、唐の客、入京。この日に飾騎七十五匹を遣して、唐の客を海石榴市のちまたに迎う。額田部比羅夫、もって礼辞を告げる。
- ・12日に唐の客を朝廷に召して使いの旨を奏さしむ。時に阿部鳥臣、物部依網連抱の二人を客の導者とす。ここに大唐國の信物を庭中に置く。時に使斐世清、親ら書を持ちて両度再拜。使いの旨を言上してたつ。

その書に曰く、「皇帝、倭皇に問う。使人長吏蘇因高ら至って懷を具にす。朕、宝命を承けるを歎び、区宇を仰ぎ臨む。徳化を弘め、含靈におよび被らしむことを思う。愛育の情、遐き瀛きに隔てなし。皇、海表に介居して民庶を撫寧し、境内安樂にして風俗融和、深氣至誠、遠く朝貢する脩つを知る。丹款なる美、朕嘉するあり。稍喧なり。比は常の如し。故に鴻臚寺の掌客斐世清らを遣して稍に往くの意を宣ふ。あわせて物送ること別の如し」。

時に阿部臣、出でて進み、その書を受けて進行。大伴嚙連、迎え出て書を承け、大門の前の机の上に置いて奏す。事終わりにて退く。この時、皇子、諸王、悉く金の鬘花をもって頭に着せり。また、衣服に皆錦、紫、繡、織および五色の綾羅を用う。(一に云う、福の色は皆冠の色を用いるという)16日に唐の客らを朝(庭)において饗す。

- ・9月5日に、客らを難波の大郡に饗す。
- ・9月11日に唐の客斐世清、罷り帰る。すなわち復、小野妹子臣をもって大使とす。吉士雄成を小使とす。(鞍作)福利を通事とし、唐の客に副えて遣す。ここに、天皇、唐の帝に聘す。その辞に曰く「東、

敬みて西の皇帝に白す。使人鴻臚寺の掌客斐世清ら至りて、久しき憶方に解けぬ。季秋薄に冷し。尊、如何。想うに清念にか。此れは即ち常の如し。今、大礼蘇因高、大礼乎那利らを遣して往かしむ。謹しみて白す。具ならず」。この時に、唐國に遣わす学生、倭漢直福因、奈羅訳語恵明、高向漢人玄理、新漢人大罔、学問僧新漢人日文、南淵漢人請安、志賀漢人慧隱、新漢人広濟らあわせて8人なり。

推古22年(614)

・6月13日に、犬上御田歟・矢田部造を大唐に遣す。

これらの記事はまた多くの混乱を引き起こしてきた。

唐と日本國の外交記事

- (1) この記事は遣隋使ではない。遣唐使の記事である。
- (2) 唐の使者の名は「鴻臚寺の掌客斐世清」である。「隋書第81巻列伝東夷倭国」に書かれた隋の使者は「文林郎裴清」である。むろん二人は別人である。この二人を同一人物と考える人は、「裴清と名前を書いたのは、唐の李世民を避諱して裴清となった」と説明する。しかし唐の国使の姓について、唐国書は「斐世清」と「世」の字を使っている。当の本人の国が「世」という字を使って国書にその名前を書いているのである。唐太宗李世民的「世」を嫌って本当の名前は「斐世清」だったが「裴清」としたというのでは説明になっていない。隨の使者は「裴清」である。唐の使者は「斐世清」である。

推古15年(607)、7月戊申朔戊に、大禮小野臣妹子を大唐に遣す。

推古16年(608)、夏4月小野臣妹子、大唐より至る。唐國、妹子臣を號けて蘇因高と曰ふ。即ち大唐の使人斐世清・下客十二人、妹子臣に従ひて、筑紫に至る。

推古15年(607)は遣唐使の記事である。607年は隨である。推古紀編者は「遣唐使」の記事を隨の時代に挿入した。

- (3) 客ら難波津に泊まり。この日に、飾り船三十艘をもって客らを江口に迎えて、新しき館に安置する。
8月3日、唐の客、入京。
「難波津」とは大阪難波である。「江口」は大阪市東淀川区の「江口」である。現在に地名として残る。その名の通り淀川からその支流神崎川と分かれる川の入口である。入京と書かれた「京」とは奈良藤原京である。唐の客を迎えた國は日本國である。



- (4) 唐の客のために、また新しき館を難波の高句麗館の上に造る。

この文は今回の唐の客が日本國への最初の客だということを示す。唐からの初めての使者のために、難波に迎賓館を新しく建てた。初めての遣唐使として日本國王上宮法皇の腹心大禮小野臣妹子が遣唐使となった。

第一回遣唐使は推古15年(607)ではない。唐建国の翌年の619年である。

- (1) 遣唐使を日本書紀は「推古15年(607)」とする。これは明白なまちがいである。607年の中国王朝は隋である。唐建国は618年である。唐の高祖李淵が随恭帝に禅譲させて自らが帝位につき、元号を「武徳」として唐王朝を建国したのが618年である。故、遣唐使は618年以降となる。そして、李淵が隋都・洛陽に入り、「鄭國」を滅ぼしたのが「武徳4年(621)」の事である。
- (2) 日本國の第一回遣唐使は一回り、12年後の619年である。

『旧唐書』倭国日本伝

貞観5年(631)、使いを遣わして方物を献ず。太宗、その道の遠きを矜み、所司に勅して、歳貢せしむることなからしむ。また、新州の刺史高表仁を遣わし、節を持し、往きてこれを撫せしむ。表仁、綏遠の才なく、王子と礼を争い、朝命を宣べずして還る。二十二年に至りまた、新羅に付して表を奉り、もって起居を通ず。

旧唐書・倭国日本伝は「631年に日本國遣唐使が来た」と伝えている。しかし唐建国は618年である。631年に初めて遣唐使を派遣したとすればいかにも遅すぎる。618年の唐建国に対して、極東アジアの国々は、すぐさま反応して、祝賀の国使を派遣している。高句麗は、高祖即位の翌年、619年(武徳2年)に国使を派遣した。621年(武徳4年)に新羅・百済が使者を派遣した。そして、624年(武徳7年)には高句麗王は「上柱國・遼東郡主」に任命、新羅王は「柱國・樂浪郡主」に任命、百済王は「帶方郡主」とそれぞれ任命されている。これら三国は唐建国後直ちに遣唐使を派遣した。日本國だけが建国から13年経った631年に遅れに遅れて遣唐使を派遣したのであろうか。すでに日本國王・上宮法皇は隋との外交を開始していた。情報はすぐもたらされたはずであろう。

日本國は深い親交のあった高句麗と同じ619年に祝賀の国使を派遣したと考えるべきであろう。唐も日本國の建国祝賀の国使に対してすぐさま「鴻臚寺の掌客斐世清」を国使として派遣した。このように読むべきであろう。日本書紀・推古15年(607)の遣唐使の派遣年代は12年ずれている。実際は619年に第一回遣唐使が派遣された。日本書紀は12年(一回り)まちがって記載した。旧唐書に記載されている「631年・遣唐使」は唐の皇帝が「高祖李淵(618～626)」から「太宗李世民(626～649)」に代わって、その即位祝賀の国使である。631年・遣唐使は李世民即位の祝賀大使であった。この遣唐使は第二回目である。双方あまり感激がないような書き方である。遣唐使とは本来、中国皇帝即位の祝賀使節である。

上宮聖王の側近小野妹子と吉士雄成

- (1) 唐建国を祝う使節団長は小野妹子。

「唐國、妹子臣を號けて蘇因高と曰ふ」と、唐は小野妹子を蘇因高呼んでいる。小野妹子と日本國王上宮聖王とは深い主従関係にあった。上宮聖王が生まれ、3人の養育係の姫が撰ばれました。その一人が小野妹子の娘であった。小野妹子と上宮聖王との間には強い絆があった。小野妹子の墓は大阪府太子町にあり、上宮聖王の太子廟(叡福寺)からそれほど離れていない。小野妹子は上宮聖王の腹心であった。よって遣唐使として唐に遣わされた。遣唐使を派遣した王は日本國王である上宮法皇であった。

- (2) 小野妹子臣をもって大使とす。吉士雄成を小使とす。

9月11日、唐国使が帰国する時、二人の送使が撰ばれます。「小野妹子」と「吉士雄成」です。「雄成」について岡本精一氏の解説を読んでみよう。

太子側近の一人、調子丸も百済からの渡来人である。百済の聖明王の弟、調宰相の子で、十三の時来日し、太子の側近として仕え、太子の愛馬黒駒の御者(舍人)となり、生涯、太子に尽くした。斑鳩宮の西北の角、今の東里に住居があったと『大和志料』に述べている。…

また百済王の豊璋は、新羅との戦いに敗れ、日本に亡命してきて大和に住んだ。その子孫は大原姓を名のり、兄弟三人で推古六年(598)に片岡王寺(放光禪寺)を建てた。この寺名から王寺町という町名が付けられたという。百済の扶余出土の瓦とよく似た瓦が発掘され、百済と片岡王寺と関係があったことが分か

る。…

また『広隆寺縁起』によると、六二三年に秦河勝が京都葛野の太秦に広隆寺を建て、太子の冥福を祈り追善供養した。その時、新羅の真平王献上の弥勒菩薩を祭った。それは宝冠のある半跏思惟像で、今も国宝弥勒像として伝わっている、と広隆寺では述べている。…

ここで少し秦河勝の祖先のことを述べてみよう。秦氏の祖先は応神天皇のころ渡来した新羅系渡来人で、淀川中流や近江愛知郡や大和・河内に住んでいた。秦一族の中では、京都葛野の秦氏が最も勢力があった。養蚕や機織りだけでなく灌漑や開墾も行った。京都の稻荷神社は秦氏が祭った神社である。秦河勝は太子の側近として仕え、大仁の冠位をもらい、六一〇年には新羅の使者の接待役もしている。もうひとり、太子の側近として活躍した難波吉士雄成も、新羅系渡来人子孫といわれている。この雄成は、難波を中心に勢力をもっていた。そして難波に私寺として四天王寺を建てたとされている。

(「飛鳥寺と聖徳太子」岡本精一)

吉士雄成もまた上宮法皇の側近であった。また難波に勢力を持ち四天王寺を建立した。四天王寺は上宮聖王を祀る。



小野妹子墓（大阪府太子町）

唐書・倭皇は上宮法皇 唐皇帝の国書

その書に曰く、「皇帝、倭皇に問う。使人長吏蘇因高ら至って懐を具にす。朕、宝命を承けるを欽び、区宇を仰ぎ臨む。徳化を弘め、含靈におよび被らしむことを思う。愛育の情、遐き邇きに隔てなし。皇、海表に介居して民庶を撫寧し、境内安楽にして風俗融和、深氣至誠、遠く朝貢する脩つを知る。丹款なる美、朕嘉するあり。稍喧なり。比は常の如し。故に鴻臚寺の掌客斐世清らを遣して稍に往くの意を宣ぶ。あわせて物送ること別の如し

国書には「朕、宝命を承けるを欽び」と、皇帝に即いた高祖「李淵」の言葉がある。従って、唐建国後すぐ日本國が国使を派遣したと考えてよい。

皇、海表に介居して民庶を撫寧し、境内安楽にして風俗融和、深氣至誠、遠く朝貢する脩つを知る。

高祖は日本國王に対して好意的である。「倭皇」「皇」とは日本國王・上宮聖王である。

ここに、天皇、唐の帝に聘す。その辞に曰く「東、敬みて西の皇帝に白す。使人鴻臚寺の掌客斐世清ら至りて、久しき憶方に解けぬ。季秋薄に冷し。尊、如何。想うに清念にか。此れは即ち常の如し。今、大札蘇因高、大札乎那利らを遣して往かしむ。謹しみて白す。具ならず。

このように日本國王はお礼をのべている。上宮聖王が抱いていた「久しき憶」とは何か。恐らく唐の対日政策に関するものであろう。唐は日本へ侵略する意思があるかどうか。この一点を日本國王は知りたかった。この懸念に対する回答を鴻臚寺の掌客斐世清は持ってきたのであろう。唐高祖は日本國に対して友好的であった。それを読んで日本國・上宮聖王は安堵したのである。高祖李淵は平和を約束したのである。もうひとつ、推古紀の記事には重要な問題が隠れている。

ここに、天皇、唐の帝に聘す。

天皇とは誰なのか。天皇とは日本國王・上宮聖王である。自らを「菩薩天子」と云い、「倭皇」と呼ばれ、腹心の小野妹子を派遣した人物は日本國王・上宮聖王である。「隋書」「唐国書」に登場する王は「上宮聖王」である。推古紀において「天皇」と記した人物は上宮聖王である。推古天皇ではない。推古紀は日本國・上宮法皇の記録である。

京は藤原京

- ・12日に唐の客を朝廷に召して使いの旨を奏さしむ。時に阿部臣、出でて進み、その書を受けて進行。大伴嚙連、迎え出て書を承け、大門の前の机の上に置いて奏す。事終わりに退く。この時、皇子、諸王、悉く金の鬘花をもって頭に着せり。また、衣服に皆錦、紫、繡、織および五色の綾羅を用う。(一に云う、服の色は皆冠の色を用いるという)
- ・16日に唐の客らを朝(庭)において饗す。

唐国使使斐世清が国書を渡す情景を描いている。場所は「京」の朝庭である。国書は使斐世清から阿部臣へ渡され、大伴嚙連が受け取り「大門」の机の上に置いた。その先には日本國王が居た。國王は上宮法皇である。推古紀は「遣唐使」を「推古15年(607)」としているが実は12年後の619年だった。

推古紀編纂者のミスである。編者は年代を12年まちがえて推古15年に挿入した。だがこのまちがいは12年(一回り)計算が狂っているが小野妹子は遣隋使として随に行ったのかも知れない。ゆえに推古15年の随の時代に小野妹子の記事を挿入したと考えられる。

小野妹子は遣隋使として始めて唐に渡った。そして唐が建国した時再び唐に渡ったのであろう。

隋皇帝、唐皇帝に国使を派遣し、隋、唐からの使者と面会した王は日本國王上宮法皇であった。いずれの国使も大阪・難波に上陸し、迎賓館で接待を受け「京」に入った。「京」とは「藤原京」であろう。藤原京の朝廷において国使は日本國王に国書を奉じたのである。

日本國遣唐使(第2回～第5回) 第2回遣唐使

第2回遣唐使が630年に派遣された。それを伝えたのが次の記事である。唐の接待者は「新州の刺史高表仁」である。彼は王子と喧嘩をして帰ってしまう。

631『旧唐書』倭国日本伝

貞観5年(631)、使いを遣わして方物を献ず。太宗、その道の遠きを矜み、所司に勅して、歳貢せしむる

ことなからしむ。また、新州の刺史高表仁を遣わし、節を持し、往きてこれを撫せしむ。表仁、綏遠の才なく、王子と礼を争い、朝命を宣べずして還る。二十二年に至りまた、新羅に付して表を奉り、もって起居を通ず。

長吏大礼蘇因高が第一回遣唐使で、旧唐書の631年遣唐使は二回目である。この時の中国皇帝は太宗李世民で即位祝賀の使がこの遣唐使である。

その道の遠きを矜み、所司に勅して、歳貢せしむることなからしむ。

太宗李世民はこのように云い、友好的であったが二回の高句麗遠征を行い、いよいよ唐は膨張施策を始めた。

642 百濟義慈王、高句麗と共に新羅(女王善徳)侵略。新羅・金春秋・唐に出兵要請

645(貞観19年) 唐太宗水軍4萬陸軍6萬で高句麗を攻める。失敗。

第3回遣唐使

650年、唐は高宗李治が即位する。この祝賀に遣唐使が派遣された。

653(白雉4年) 遣唐使吉士長丹・高田根麻呂

654(白雉5年) 遣唐使高向玄理河邊麻呂

654 倭国琥珀と瑪瑙を貢献(旧唐書本紀)、新羅武列王即位

第4回遣唐使

659 第四回遣唐使(高宗李治)

遣唐使・坂合部石布・津守吉祥(「斉明5年」)

この遣唐使は和平工作であろう。しかし直後日本國滅亡の原因となった「白村江」での戦いに突入してしまう。

660 唐「蘇定方」が水陸13萬で百濟侵略・百濟平定。「唐」は「熊津」をはじめ5都督府を置く。

662 白村江(旧唐書)

665 「劉仁軌」が「新羅及び百濟、耽羅、倭の4国酋長を連行」(旧唐書)

668 「高句麗」平壤陥落。安東都護府と9都督府を置く。

第5回遣唐使

670 倭国遣唐使。祝賀高句麗平定(新唐日本伝)

ここまでが日本國の遣唐使である。